

村上正治先生の思い出 “81歳の名ドライバー”

村上先生の思い出に関しては、尽きることがない。まずは、アンコールで恒例になっていた、自らオケ版に編曲した楽曲を、会場の皆さんと声高らかに歌いながら指揮を執られたこと。歌の好きな小生にとっては至福の刻で、演奏しながら一緒に歌ったものである。

もう一つは、「嬉しそうに運転される先生のお姿」である。県内の「移動コンサート」の折には、団員が乗る貸切り大型バスを、得意なハンドル捌きで追い越し、またたく間に視野の彼方へ……それは「第254回 市響45周年記念 日中交流コンサート」を控えた平成8年3月のこと。市川市内の村上先生宅に市響の幹部・横田行雄さん、美保（桐朋学園大4年生）、青木暢男・瀋陽音楽院客員教授率いる中国の関係者、霍存慧・瀋陽音楽院作曲科主任教授、高松華国立中国音楽院作曲科副教授（東京藝大作曲科修了）が集まり、本邦初演となる高氏の「ヴァイオリンとオーケストラ」の為の幻想曲”や他の曲目などについて打ち合わせが行われ、散会した後のことである。

村上先生が「大事なお客様さんなので、佐倉のお宅まで自分の車で送り届ける」と言い出され、折りしもみぞれ混じりの悪天候で、走行は危ないという一悶着あったにもかかわらず、ルンルン気分ですタートしたという。早速、横田さんから、家人の元に「先生の運転で、京葉道路を利用してこちらに向かいましたので……80歳を超え、天候のこともあるし、夜間の高速道路を走るのには止めてください」と言ったものの、聞く耳を持たずに出てきてしまいましたが、その連絡が入った。長女の話では「とっても優しい先生で、楽しそうに運転されて、また、面白い話をしてくださったので、あつという間に家に着いた」とのこと。現役の小生は連日帰宅が遅かった、驚いたことだった。今でも、先生の「81歳の名ドライバー」は、家族の貴重な思い出として、息づいてる。

第二ヴァイオリン 木佐貫秀彌

「私には、それが正しいことか、間違っている概念なのかは別として、ではあるが、指揮者・教育者スワロフスキーに関する記憶に残るのは、ただそれだけである。」

もう一人の恩師フェラーラ

私は日本にいたときから「シエナにフランク・フェラーラという凄い天才指揮者がいる」と聞いていた。そして、絶対に会わなければならないと決めていた。

1973年7月、チェリビダツケに勇気と元気をもらって、張り切ってイタリアのシエナ・キジヤーナ音楽院に向かった。そこでフェラーラが夏の国際指揮講習会を開いていたからだ。講習会を受けるためにはまず実技の試験があり、曲は当日指定とのこと。130人の応募があり、10人が選ばれて、オーケストラを振ることが出来る、とのことだった。試験の当日、講習会で使うスコアを山ほど抱えて、集合場所に行った。試験会場はカンポ広場に面した、こじんまりとしたペラ劇場だった。私には「オペラ序曲」が課題曲として与えられた。試験は数日間続き、130人全員に公平に振らせるが、見込みがなければすぐ次の人に交代させられるとのこと。ついに私の番がきた。まだフェラーラの顔もわからない。しょうがないと開き直って、オペロンを振り始める。いつ止められるかと不安で仕方がなかった。序奏からアレグロに入った、まだ止められない。「ほんまかいな？」と、審査員あたりの、客席を降りかえってみた。眼が合った、アッ、絶対彼がフェラーラだ！ 微笑んでいる！ 一緒に腕を振っている！……、ひよっと

齋藤純一郎（当団常任指揮者）

（以下、次号）

我が棒振り修業時代！ 指揮者 齋藤純一郎

大好評！ 第3回



シエナのディプロマ

天才指揮者 フェラーラとの出会い

閑話休題

1972年5月10日、横浜から船でナホトカ港に上陸し、ついで夜行列車でハバロフスクに着いた。そこから、本当はシベリア鉄道、そして「シヨパン号」と乗り継いで、陸路ウイーンに入りたかったのだが、当時のウイザやパスポートの取得手続きがあまりに煩雑だったのでも、モスクワまで空路で行き、そこからオーストリア航空で、5月14日にウイーンのシュヴェヒャト空港に降り立った。出迎えの友人や知人もなく、すぐさま迷子に陥ってしまった。それでも取りあえずバスで街の中心まで行き、「HOTEL GOLDENES LAMM」（金色の子羊）という相当に安いホテルを投宿先に決めた。もちろんバス・トイレは、なし。洗面台は水が出るだけ一滴の湯も出ない。ところがなんとそのホテルには、「ここに何年から何年まで、ドヴォルザークが住んでいた」と書いてある看板がかかっていた。気がつくともうウイーンではいた

るところに「ここでモーツァルトが『フィガロ』を作曲した……」「ここでベートーヴェンが『エロイカ』を作曲した」「シューベルトが……『菩提樹』……」「ブラームスが……」「シヨパンが……」などという看板を見かける。あらためて「音楽の街に住むのだ」という嬉しさが、こみ上げてきた。

ホテルに落ち着くと、不動産屋に行つて身振り手振りを交えて話をし、ウイーンの19区に部屋を見つけ、住み始めた。グリントツィンク、ハイリゲンシュタットなど、ワインを飲ませる「ホイリゲ」で有名な地区であった。家主は、戦争で両眼を負傷して全盲だった。言葉や発音を丁寧に教えてくれてありがたいうちもあつたのだが、すべからず耳で判断しようとするので、外出・帰宅のチェックがいささか過剰で困り果てていた。3か月ほど我慢したが、知り合いのチェリストの娘さんが結婚するというので空いた部屋に住まわせてもらうことになった。そこはオペラ座へも、ムジークフェラインへも、コンツェルトハウスへも、徒歩15分の絶好の場所だった。

ウイーンに着いてすぐ、私の連日の音楽会通いが始まった。記念すべき第一回が1972年5月18日「運命の力」（オペラ座）、5月19日ミケランジェリのコンサート（ムジークフェライン）と続く（詳しくは、初回原稿の「コンサート三昧のウイーン時代」に重複するので、控えることにする）。

ハンス・スワロフスキーの思い出

まずドイツ語を学ばねばと、はじめての年の夏はウイーン大学のドイツ語夏期講習に通った。ウイーン音楽大学は、

10月に始まるが、その前に指揮科教授のハンス・スワロフスキーに会いに行つた。そこで「君は、ディプロマを持っていくかい？」と聞かれた。「えーと、ディプロマとはなんぞや？」と考えているうちに、「それなら、取りあえず作曲科に行きなさい」という話になった。

この一瞬の出来事は、「人生、もし……；だったら、もしも……してれば」の大きな岐路であった。「はい！」と即答するべきだったのだ。わざわざ日本の国立音楽大学を卒業したという英語訳の証明書を用意していったのに、即座に専門コースの授業を受けられる。「免罪符」を使い損なつたのである。しかし、そんなこととは露知らずで、作曲科に入ったものの、初歩の和声の授業に飽き飽きし、スワロフスキーのオーケストラの授業や講義に出ても、片腕（左手）を縛って右腕だけで指揮する練習といったもので、正直こんなものかと、がっかりしたこともあつて、学校には次第に足が遠のいていった。

あるとき、「今度、シンフォニカー（ウイーン交響楽団のこと）で、マーラーの3番の交響曲を、指揮する。これは珍しい曲だから、指揮科の学生は、良く準備して、リハーサルを観に来るように」との話があり、観に行つた。そのときのスワロフスキーのプロオケの指揮は、「何もしないで、何も言わないで、オーケストラはここまで出来るのか」という意味で興味深かった。また、オペラ座でスワロフスキーの『魔笛』の指揮を観て、ある意味での彼の職人気質に、好意的に感心はした。ただ、スワロフスキーの言った言葉で「モーツァルトはテンポが一つだ」といったことだけは、良く覚え